湖(うみ)に育った鳥人たち

春はみず面に秀麗な影を落した近江富士。夏は瀬田の唐橋を漕ぎい出すエイト・フォアーの競走艇。秋はもみぢ葉舞う堅田の浮御堂。冬は白雪をいただく比良、比叡の峨々たる山なみと、四季それぞれの美しい風景にはぐくまれ、育てられた若鳥達が或る日決然として飛び立った。

今、彼等は何を思い、何処の梢に翼を休めていることであろう。

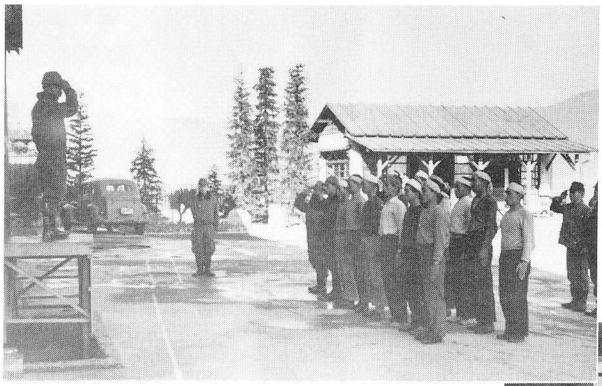
かつて雄々しく、荒々しく波立った琵琶のうみも、岸辺に立って遥かに三上山を望み、ユタユタと打寄せるさざ波に浮ぶ水鳥の姿を見るとき、母の懐に抱かれたぬくもりにも似た永遠の安らぎを覚えないではいられない。

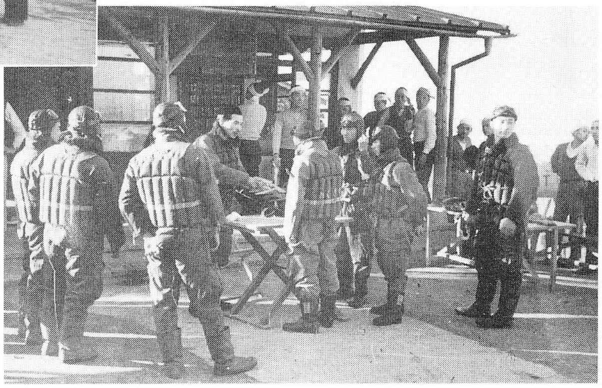
琵琶湖は今も我々の心の故郷である。

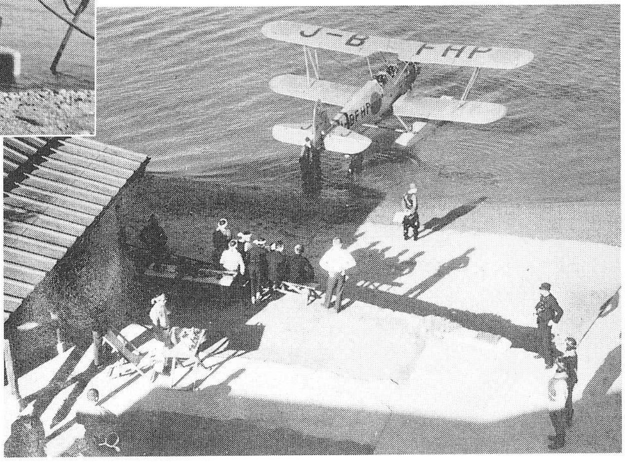
九〇式初歩練習機

思い出の写真集

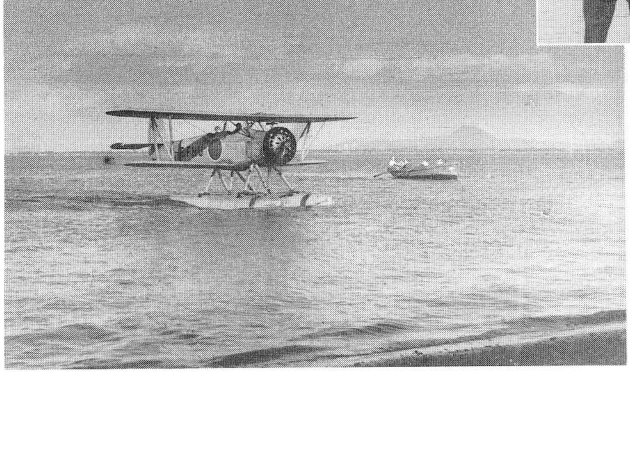
訓　練

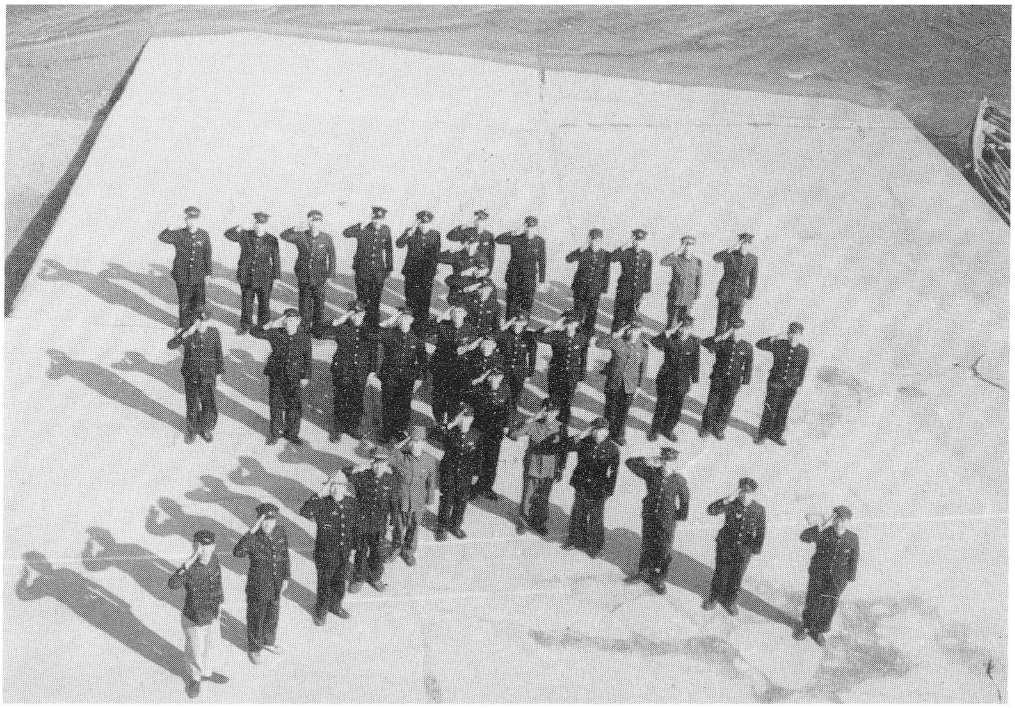






風　景





〝敬礼〟　天虎訓練所

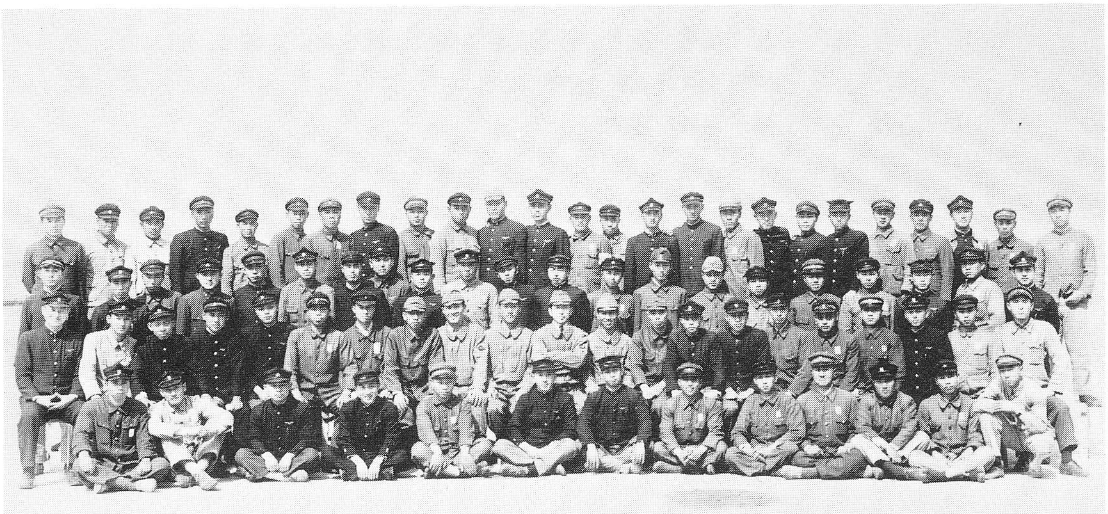
納屋　嘉治

大空に思いをはせて（納屋嘉治氏提供）

佐藤教官を囲んで

いざ飛ばん!!

同大教練査閲　空中参加者の出発（昭和18年11月）



天虎訓練所　第一期・第二期全員集合（昭和18年12月）

海洋部小史

昭和５年４月28日	日本学生航空連盟創立(朝日新聞社後援)。
昭和６年７月28日	同　上。財団法人設立許可。
昭和８年12月６日	海軍航空予備学生制度新設方針決まる(大臣決裁)。
昭和９年	勅令第293号に基づき、海軍省令第11号を以て制度が新設された。
昭和９年６月１日	㈶日本学生航空連盟内に海洋部を設置(航空本部後援)。
昭和９年７月10日	日本学生航空連盟海洋部の発会式が羽田飛行場で行われ、教育を開始した。
昭和10年11月	航空関係海軍予備士官の補習教育を併せ行う。
昭和11年７月10日	日本学生航空連盟海洋部を廃し、海軍航空予備学生志願者の準備教育を行うことを目的として新たに㈶学生海洋飛行団が設立された。 関東・関西の２支部が設けられ、関東支部は羽田の海洋部をそのまま引継ぎ教育を開始した。
昭和11年10月19日	関西支部は第１年団員20名の募集を始める。
昭和12年３月	関東支部(羽田)、関西支部(大津)施設工事竣工。
昭和12年４月５日	関西支部、琵琶湖畔下坂本村際川で教育開始。
昭和12年９月15日	海軍予備航空団と名称を変更、関東支部を東京支部に、関西支部を大津支部と改称した。
昭和16年５月	海軍予備航空団閉鎖。

昭和18年５月	天虎訓練所開所(大津市馬場里中40)。 第一期生訓練開始。
昭和18年11月	第二期生訓練開始。

予備学生一覧表（塔乗員のみ）

水交編集部資料による

	期別	入隊年月日	採用員数	卒業員数	戦死殉職	記　　事
日本学生航空連盟海洋部の卒業者	1	昭和 9.11.	6	5	0	卒業後一旦社会に出た後、充員召集を受けた。
	2	10. 5. 1	15	14	5	
	3	11. 4.13	17	17	1	
学生海洋飛行団の卒業者	4	12. 4.12	14	12	6	以後卒業と同時に充員召集を受けた。
海軍予備航空団の卒業者（大津支部は6期から）	5	13. 4.15	20	19	9	
	6	14. 4.11	30	26	10	
	7	15. 4.15	33	32	24	
	8	16. 4.15	44	43	22	
	9	17. 1.12	239	34	22	
	10	17. 6.20		操縦48 偵察50 } 98	61	
	11	17. 9.30		85	68	
	12	17. 9.30		61	26	
	13	18.10. 1	8,182	4,726	1,535	
学徒動員令により海兵団に入団後志願により採用	14	18.12. 1		1,954	239	
	15	19. 9.30	2,278	1,854	15	
計				8,980	2,043	

（註）（1）採用員数は、昭和19年２月海軍省人事局の調査による。
（2）卒業員数は、白鷗会発行の「雲流るる果に」による。
（3）昭和17年における採用員数(239名)は、卒業員数(278名)より少いが、その理由は不明。

南方秘話

小　原　　博

41年前、昭和20年２月16日は、米軍機動部隊が関東方面に飛来した日である。北浦空もグラマンＦ６Ｆの反復攻撃をうけた。かねて空襲に備えて練習機は湖畔に分散配置してあった。当日は全機、琵琶湖に移動さす準備を進めていたやさきのことである。手持の２式水戦２機を上空に上げ、滑走台の指揮所で指揮中、ロケット弾を浴びた。腹部盲貫爆弾々片創、腸損傷で霞浦海軍病院に運ばれ、腸30センチを切除した。

当時、北浦空では、第14期飛行専修予備学生水上機班110名の操縦訓練を行っていた。慶応出身の同期が分隊長をしていたが、昭和19年９月末、マレー半島の西岸ペナン島で彼と交代、引継ぎ、10月１日北浦に着任した。

ペナン島は、潜水艦による日独連絡航路の拠点になっていた。水偵隊は、これら日独潜水艦の出入港時の護衛、マラッカ海峡通過時の対潜哨戒を任務としていた。ベンガル湾方面から入港する潜水艦に対しては、アンダマン島ポートブレヤー水上基地、マレー半島北部ビルマのメルグイ水上基地に水偵を配備していた。ペナンの独海軍からは潜水艦塔載の小型水上機１機、塔乗員士官１名、下士官１名、整備員数名を我が水上基地に派遣していた。こちらの指揮下にはいって行動していたので、独海軍武官府より、たびたび通訳のひとに来ていただいた。同志社先輩の西川磯吉氏だった。

独潜水艦は大西洋からアフリカ南端喜望峰を回り、マダガスカル島からインド洋へと行動してペナン島に入港していた。帰路はゴム・錫・タングステンなどの戦略物資を積載していた。

ペナン島の桟橋には独潜水艦が数隻繋留してあった。ある日異様なものを塔載しているのに気付いたので、その艦を訪ねてみたところ、見張り用の１人乗り飛行凧だった。写真、取扱説明書、用法などの資料一式は、北浦空着任後直ちに空技廠に持ちこんだ。潜水艦に曳航されて浮上するヘリコプター式グライダーであった。

昭和16年１月、対米戦に備え19空が開隊され、マーシャル群島ヤルート環礁のイメージ島に進出することになった。このとき以来、零式三座水上偵察機に塔乗することになった。クエゼリン、ウオツゼ、ミレなどへ飛んで基地調査に従事した。

イメージ島へは司令の要望で、ローラカナリヤ５つがいを親戚から貰い持参した。

昭和16年９月末、離島する頃には、大いに繁殖していて美声でさえずり続けていた。最近、イメージ島守備隊の戦記が出版されたようなので、ローラカナリヤの消息を尋ねたいと思っている。

開戦前、水偵６機を率いて北朝鮮元山水上基地で船団護衛の任に就いていた。陸軍の司令官に挨拶に伺ったところ、なんと京三中時代の配属将校だった。向う脛を蹴られたことなど想い出し、笑い話のうちに退出した。

開戦後、水上機母艦「能登呂」でインド洋アンダマン諸島のポートブレヤーに進出。インド洋の敵機動部隊索敵に従事することになった。

当時、こちらは電探を装備していなかったので、もっぱら目視で、先端300海里の圏内洋上を低空で索敵をしていた。

スマトラ島西岸シボルガの飛行艇隊が太平洋南東海域に移動した後のインド洋索敵は水偵隊が引き継いでシボルガに進出した。昭和19年６月の「あ号作戦」（マリアナ戦）にはフィリピン、ミンダナオ島ダバオに進出、艦隊の作戦に参加した。

私の率いる零式水偵隊はインド洋、南シナ海の対潜哨戒、船団護衛を受持っていた。インドシナ(ヴェトナム)のカムラン湾基地、北ボルネオのラブアン島水上基地、シンガポールのセレター水上基地、サイゴンのカットライ水上各基地に水偵隊を配置していた。カムラン基地の水偵隊の活躍は特に顕著で、軍令部源田実参謀から、セレター基地で説明を求められ、さらに10数機を増やしていただいた。昭和18年11月1日、海軍大尉に任ぜられた頃は手持ち機数24機であった。

昭和18年末には電探を装備するようになったが、各国にさきがけて開発された磁探は配分されるまでには至らなかった。対潜哨戒船団護衛は60キロ爆弾4個を携行、推測航法で洋上目的海面に到達し、艦船または船団と会合して前路、側方を目視で見張、警戒するものであった。黎明、薄暮の発進、夜間飛行にまたがることもあり、塔乗員の練度は艦隊塔乗員以上に向上していた。南東海域の塔乗員の消耗がいちじるしくなるにつれ、これの補充のため、我が水偵隊からもつぎつぎ引き抜かれていった。19年3月下旬リンガ泊地に在泊の艦隊水偵隊が、呉空からシンガポールまで零式三座水偵を空輸するのに、沖縄・台湾・海南島・サイゴンを経由して5日も費やしていた。それと較べると、わが水偵隊塔乗員は、佐世保から東港(台湾)1泊、マニラ・カムラン経由シンガポールまで2日で空輸していた。アンダマン島ポートブレヤからシンガポールまでも、ペナン島を経由せずいっきに飛んでいた。

対潜水艦攻撃の戦果については、浮遊物、油の流失などで効果を判定・確認し報告していた。

しかし、米軍の発表する損害を見ないかぎり、

零式水上偵察機

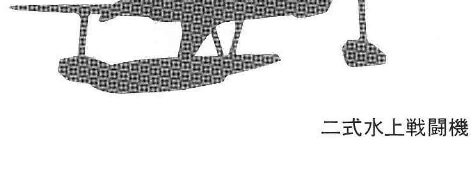
正確なことは判らない。北浦空に着任してしばらく経った頃、西沙諸島で坐礁した米潜水艦の航海日誌が公報に発表されていた。

ミンダナオ島西方スルー海で水上機発見、潜航という記事があったので、当日のことを思い出して調べてみたところ、附近海面には我が水上機しかなく「異状なし」と報告していた。目視のみによる哨戒が如何に当てにならないものであるかを痛感した。

負傷するまえ２月初旬、日吉の海軍当局に呼び出され、新しく編成する彩雲の偵察隊長に転出の内示をうけていた。艦隊正面戦域で彩雲の真価を存分に発揮してみたいと決意していたのに、入院により期待に応えることができず残念であった。

神風特別攻撃隊「魁隊」の出発を見送るためいったん北浦空に戻ったが、その後は自宅療養、東京航空隊分隊長兼教官、自宅療養を繰り返し終戦となった。９月１日充員召集が解除されたので、霞ケ浦海軍病院に再入院、治療をうけ昭和21年初め退院、社会に出た。学部卒業以来７年後のことであった。

（昭和14年卒）



二式水上戦闘機

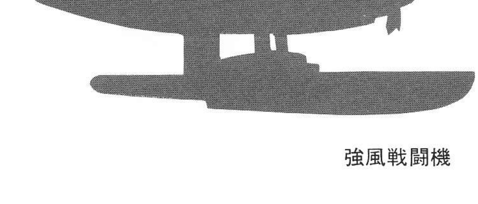
海軍予備航空団

小　畑　政　次

私は昭和14年11月海軍予備航空団大津支部に入団。初めて飛行機に乗れたのです。当時大学の級友に牧野伊兵衛君、橋本元雄君、西田君等が日本学生航空連盟で大活躍。特に橋本元雄君が日本学生航空連盟の飛行大会で定着に優勝。その他８字飛行でも同大勢が優勝するなど全日本の大学生として同志社大学は大空に君臨していたのです。私も飛行機に乗りたくその時に先輩小原博氏が海軍予備士官として飛行機に乗っておられる話を聞き、私も入団を決意。入団試験(身体検査、学科試験）にパス。琵琶湖ホテルの北側にあった航空団で水上機に乗った次第です。予備航空団は海軍と名付けられたように、学校卒業後は必ず海軍に志願することを義務づけられていました。飛行訓練は毎日学業の余暇に、又土・日曜日は１泊で海軍予備下士官の教員によって下駄ばきの13式水上練習機で６～７時間の訓練後単独飛行を許可されると言う海軍式の訓練でした。同大の先輩では、小原博氏(予備学生６期)だけだったようで、学部からは私が２人目だったと思います(私は９期で昭17年１月に土浦海軍航空隊に入隊)。３ヵ月間は全く月１度の飛行訓練以外は海軍士官になるための訓練で、一課目終了すればすぐテスト。実際に35名土浦に入隊の人員が、実用機に行く時には31名になっていました。私は水上偵察機(95式)・零式観測機に乗り、再び大津空で13期の予備学生、第１期飛行生徒(いづれも大学在学中に志願された方たち)の教官を命ぜられ、同時に強風(水上戦闘機)で空戦にも参加、20年332空零戦隊に転勤、同６月中支空に転勤し上海にて終戦。翌21年復員。現在は病気治療中です。同志社関係では前述の小原氏を初め２階級特進の故木野少佐。B29機を19機も撃墜した故坪井君(９期)、故木村君、故松阪

君、高商、専門部からも予備学生出身の士官として相当に活躍された先輩、後輩もおられます(13期以後は私には不明)。今はなき戦友の冥福をお祈りすると同時に、今一度スポーツとして楽しくあの広い大空を飛んでみたく思います。今日も近くの調布飛行場より民間機(セスナ等)が飛んでいます。ああ、もう一度操縦桿を握ってみたいなあ!!
—(府中市自宅にて)—

(昭和16年卒)



強風戦闘機

私の歴史

柘 植 恵 二

昭和16年3月同志社中学(旧制)を卒業。同志社大学予科に入学。学業短縮で17年10月には大学経済学科に進学した。

生者必滅会者常離とは申せ、各々が別離の運命を背負いながら天虎訓練所開設と同時に第1期生前期として入所したのは昭和18年5月である。故山本兄と金沢亮三、岡本師両君が一諸で、1年先輩の杉本兄と中学時代から同窓であった千宗室氏らは第1期生後期の入所。また山田美都男、清田政宏の両君は2期生として入所してきた。

操縦訓練は、90式初歩、93式中間練習機による操縦技量習得が目的で、京都・大阪・神戸・彦根などの各大学・高専の学生各4～5名が参加。第1期は約30名(後に前期生と称された)。2ヵ月おくれて後期生も入所し、約80名の学生が7月から2週間に亘って琵琶湖北青柳で全員合宿訓練に入った。

飛行訓練学生は当時の勤労動員やら、軍事教練の科目は免除され、学生気分そのままの集団が寝食を共にしながらの合宿訓練は、今振り返ってみても楽しい思い出の一つである。

また、この年の11月に行なわれた同志社の大学、予科教練査閲には杉本、金沢、山本、岡本、江藤の5君が編隊を組んで京都に向い、空中より査閲に参加したことも思い出の一つである。

昭和18年12月には、学修期間中の徴兵猶予が取り消され(世に謂う学徒動員)、多くの学生が戦場に向った。私も昭和19年8月に2課程在学中、第15期1次海軍飛行科専修予備学生として山田美都男君と共に土浦海軍航空隊に入隊した。きびしい訓練の後、昭和20年1月に海軍士官としての基礎教程を終ったが、私達操縦学生は、当時すでに燃料の不足は著しく、飛行訓練のための練習航空隊

天虎の想い出

千　　宗　　室

父の影響で幼少のころから乗馬が好きだった。中学生のころは、毎日馬術なるものにチャレンジしていたが、大学予科のころになると、戦いの拡大とともに馬も徴用され、乗馬も軍の部隊へ通っての練習、というよりも飼育係みたいなことをやらされた。大学２年の春、琵琶湖の膳所にある天虎水上飛行機訓練所が第１期の飛行学生を募集しているのを知り、同じ乗りものでも飛行機の方が時節に似合うとばかり、教練教官を通じて申し込んだ。

各大学、専門学校生が多く志願したが、幸い身体検査や適正検査に合格。同志社からは７名が第１期訓練生として、天虎訓練所に毎日午後から通うことになった。特典といえば、教練に出なくと

琵琶湖畔にて

への配属は行なわれず、やむなく茨城県石岡で２ヵ月にわたるセコンダリーの操縦訓練をうけるハメになった。

この訓練中、同僚の山田美都男君が米軍機の機銃掃射をあび、右肩に貫通銃傷を負い霞ケ浦海軍病院に約１ヵ月入院するという事件があった。彼はこのブランクのためか、その後の操縦教官の選にもれ、特修学生として金沢基地におもむいた。

一方、私は福井県三国で第15期２次予備学生の操縦教官として彼等を特攻兵器の塔乗要員に育成するため教育中、８月敗戦を迎えた。

復員後、未就学の第３課程への復学を希望したがすでに第２課程試験合格者の軍隊在隊者は第３課程修了とみなされ同学部卒業となった。

出身地京都市に帰った私をまちうけていたものは、あの戦後の大混乱であった。岩国でのカメラ光学の販売会社勤務。福井の新興織物会社の東京出張所勤務。47年には東京の既製服販売会社設立。横浜での婦人既製服製造卸売自営。ゲーム機械販売会社設立。次いで家庭用防災具日用雑貨販売会社取締役就任と目まぐるしい変遷を経て現在に至っている。

振り返って見ると私の人生は大学卒業後が第１期、横浜での独立自営迄が第２期、その後が第３期で30余年苦楽を共にした妻と昨年死別した後が第４期の人生で現在独りの生活を続けている。

最後に病死された杉本僚三先輩、戦死した山本雄三君等多くの戦死、病没された方々のご冥福を心からお祈りいたします。

（昭和20年卒）

もよいこと、もし陸海軍に徴兵されたときは操縦学生として採用されるようになるということ、そんなところであった。1年上級でラグビーの猛者であった杉本僚三君、山本君(いずれも故人)らと、毎日海軍式訓練を受け、水上飛行機(俗に赤トンボ)の操縦訓練を受けた。

やがて単独飛行(大体14時間から15時間の飛行訓練で、ソロでやらされる)に入ったころ、法文系学生の徴兵猶予が取り消され、徴兵検査を受けることになった。同期の仲間の多くは、当時陸軍に新しく設けられた特別操縦見習士官に採用されたが、私は杉本君らと海軍にとられた。そして、昭和18年12月海兵団に入団後あらゆる試験の関門を幸いにも突破し、海軍飛行予備学生に合格、土浦海軍航空隊に入隊したのである。当然、水上飛行機を単独まで出来る私や杉本君は、早速にも水上機に乗せられると、大いに期待したのだが、どうしたことか陸上機に回されたので、水上機なら今すぐにでも操縦出来るのに、海軍はなんて無駄なことをするのだろうと、2人で上申したが、聞いてはもらえなかった。

天虎での操縦訓練は厳しかったが、楽しかった。各大学から選抜されてきた人たちと仲良くなり素晴らしい飛行機仲間となった。なにしろ教練に出なくても出席とみなされ、教官も私たち天虎組には「よくやるなあ、頑張ってくれ」と、いつも激励してくれたものである。そんなときの他の教練組の連中は、鉄砲かついで私たちをうらめしそうに見ていたのが、今も印象に残っている。

昨年亡くなられたが、天虎の所長藤本先生は素晴らしいかただった。私が初めて飛行をご一緒させていただいた時「俺は操縦席で坐禅を組むから、覚えたことを勝手にやってみろ。危うくなったら

(納屋嘉治氏提供)

俺がやるから操縦桿(カン)を離せ」といわれ、青くなってしまった。しかし、後席にどっかと座られ腕組みをして自信にあふれたお姿は大盤石のごときで、それを見ていっぺんに安心感が出たものだ。

いろいろな海軍式訓練を受けられたこと、例えばカッターや手旗信号、モールス信号を教官一人一人から、ある時は怒鳴られながら、ある日は手をとって教えられたことは、後日海軍に入ってからとても助かった。当時の多くの仲間は、陸に海にと特攻隊員となり戦死された。残された私は、時折り思い出のアルバムを出してタイムトンネルをたどる気持ちで当時をなつかしんでいる。

(昭和21年卒)

天虎から海軍へ

田　島　　了

先日、OBの佐々木哲兄から丁寧な書状を頂き、40数年ぶりに天虎訓練所の訓練生名簿を拝見することができました。そこには今活躍中の諸兄あり、故人あり、消息不明あり、さまざまです。これも戦争という巨大なうねりに押し流された戦中学生の運命ともいえましょう。当時は、アメリカの学生は速成パイロットとして第一線で活躍できる基礎をもっているから、日本でも学生に航空機操縦を教えることによって学生へ航空知識の普及と陸海軍パイロット養成の一助にと、それまで民間パイロット訓練所であった天虎飛行訓練所が学生航空隊の訓練所として昭和18年5月に開設された。丁度春休みも終り、帰省先から大学へ出てきた4月のこと、静思館の掲示に「学生航空隊　天虎訓練所　訓練生募集」とあるのを見て、ためらうこともなくすぐ手続をとったところ、身体検査も無事通過、パスすることができた。

天虎訓練所は浜大津にあり京津電車で通うことになった。所長の藤本さんは海軍出身の名パイロットといわれた人で、美髭をたくわえ目のするどい、落着きはらった柔い物腰が特徴で、誰しもすぐファンになるような人間的魅力に満ちた奥行きのある性格の持主だった。飛行訓練は藤本所長のほか、温厚な神田教官や2人の助教が学生の指導に当ったが、教官達は皆ハートナイスばかり、厳しいなかにも張合いのある訓練が始まった。

初訓練は体験飛行から始まる。宙返りやスローロールに垂直旋回など特殊飛行にすっかり目を回したあげく、口のまわりに飯つぶを一杯つけて青くなって飛行機から下りてきた者もあったのも忘れ得ない思い出である。

学生が飛行機に乗ろうと考えた動機は私達の頃と戦後とでは全く違うだろうが、大空を自分独りの手で操縦桿を握って飛んだその瞬間は、それを経験した者のみが知る感激であろう。自分で飛んだ者でなければ分らない共感を分ちうることも知った。青春は若者の最高の特権だというが、平和の大空を飛べる若者達はその幸せを胸一杯吸いこんでほしいと思う。

近江舞子の夏季合宿訓練も終り、夢に見た単独飛行を楽しみに練習に励んでいた頃、徴兵延期が廃止され、文科系学生が陸海軍に入隊すべく学徒出陣が発表された。既に太平洋戦争の戦局は、昭和17年7月にはミッドウェー海戦の敗北につづき、18年4月18日山本連合艦隊司令長官の戦死といった悲しいニュースに、当然われわれにも来るべきものがきたという気持であった。

私は海軍志望がかなえられた。昭和18年12月広島県大竹海兵団に学帽学生服のまま入団した。ジョンベラといった水兵服から錨の帽章と紺サージの軍服にあこがれの短剣をつったのは茨城県の土浦航空隊に入った翌年の2月の末頃だった。この地に厳しい飛行適性検査にパスした精鋭2,800名が第14期飛行専修予備学生として選ばれ参集した。土浦ではもっぱら飛行機乗りになる為の基礎教育が行われた。

どこへ行くのもかけ足である。朝起きてから夜寝るまで少しも気を抜くことはできない。時には寝たと思ったら総員起しがかかり気合を入れられることもある。気を抜いてダラッとしていようがいまいが定期便のように、教官から顔が変形するほど修正なるものを頂戴するのは当り前である。緊張の日々であった。数多くの海軍のパイロットを育てあげた土浦もどうやら卒業の日がやってきたが、その前に関門がある。再度の適正検査は勿論だが、これにつけ加える面白い話がある。海軍

では操縦と偵察学生に分けて教育し、別々の任務を負うことになる。その選別方法はまず本人の希望と適正検査を基にするが、更に骨相・手相が参考にされる。この場面は阿川弘之の「山本五十六」新潮社版に出てくるが、真黒い墨を手のひらにいっぱいつけ手形を押して、鑑定の先生の前に神妙な顔で座った。科学を尊重したといわれる海軍にあっても、一寸奇妙に思えることだ。

余談だが、かのアポロを月に打上げる前にケネディ大統領が教会に許しを得たというし、未だに進化論・地動説が否定されている町や市もあるというアメリカのことを聞くと、人間社会では科学だけでは律し切れない一面もあるのだ。

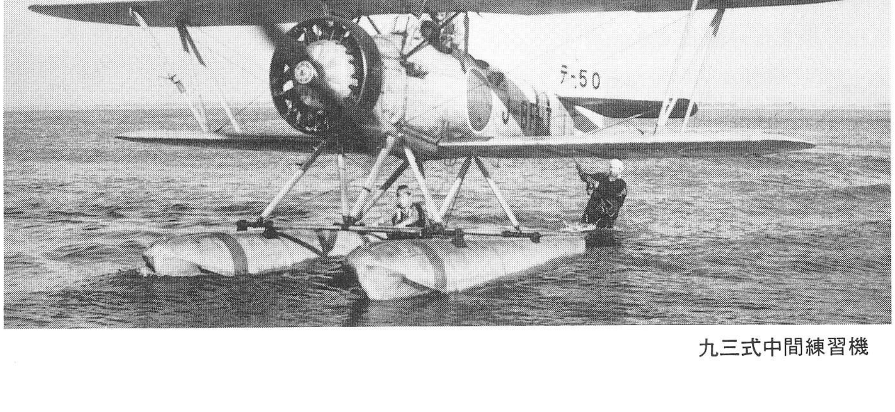
私はここで希望通り水上機の操縦にきまった。練習航空隊は茨城県の北浦航空隊だった。

赤トンボといわれた93中練による教程を了えると実用機教程に進むことになり、94水偵による訓練がはじまった。海軍機はエンジン加速レバーが前押し式で、陸軍機は全く逆で引張り式といった具合に規格が異っていたのも妙である。水上機の着水は水上15mまでアップ3度の姿勢で降下、そこから徐々に操縦桿を引き起し3点着水したら満点だが、この15mの高度判定は至難の技だ。未熟のうちは高すぎたり低すぎたりして、10m余りも落下して舌をかみそうになったり、大ジャンプして頭から海中に突込んだりの離れ技もあった。94水偵は2枚翼、三菱製瑞星850馬力のエンジンを塔せた3座の水上偵察機で巡航で13時間という抜群の航続力をもち、量産され、太平洋戦争に活躍したが、速度の点では巡航で120ノット程度と記憶している。私たちは20年2月神風特攻隊員に任命され、94水偵による特攻隊が編成された。実はこの足のおそい飛行機を以ってして、尚、立派な戦果をあげて亡くなった戦友達の記録がある。

（あとがき）

終戦時の秘話などまだいろいろのことがあった。書き残しておきたいと思いますが紙面の都合で、又機会があったら続きを書きたいと考えています。

（昭和21年卒）



九三式中間練習機

思い出すままに

吉　田　鉄　也

今回連絡いただくについては、私の住所を塚本君か井口君からお聞きになったのではないかと考えていましたが、お手紙によれば神戸兵庫区役所や、福井市役所へ再三再四の問い合せ調査されたとのこと、全く恐縮に存じております。重ね重ねのご配慮に感謝いたします。

さて、すでにお聞及びかも知れませんが、私は昭和19年8月に、塚本、外村君と一緒に第2期海軍予備生徒(予科2年からだったので生徒です)として三重海軍航空隊に入隊しました。皮肉なもので学生時代は毎日のように飛行機に乗れたのに、肝心の軍隊に入った途端、ガソリンの欠乏から飛行機には全然乗せてもらえず、グライダー訓練でお茶をにごしておりました。しかし、爆音のない静かに翼で風を切る音だけの飛行もさわやかでいいものだと思いました。

今でも印象に残っているのは、不覚にも失速し右主翼からスリップしながら墜落し、地面に激突して主翼が折れ裏返しになってセコンダリー1機を大破し、国家に大損害?を与えたことです。できるだけ高度をとりたいと操縦桿を一杯引いたのですが、空き腹で引いてくれる同僚達もへばっていてスピードがつかず、我ながら情ない始末となった訳です。それに比べると今の学生は飛行機で曳航されたりして羨ましい限りです。

たまに福井空港で関西から学生たちがグライダー練習にやって来て飛んでいるのを見ると昔が懐しく思い出されます。

それから今回発刊される50年誌関係で大変にご苦労になっている佐々木さんという名前で思い出したのですが、私が天虎に通っていた当時、道で出会った時に敬礼をしなかったということで部室で説教されたことがあります。その時の先輩が陸上機の方の佐々木さんだと今でも不思議に名前を記憶しております。佐々木さんお覚えはないですか?。

卒業後は余り勉強もしなかったので平々凡々のサラリーマン生活を送っています。福井新聞に20年余りいたのですが8年前に新しい地方新聞として日刊福井が創立されたのを機にこちらに移りました。

子供達も(1女1男)すでに仕上っているので現在は気楽にノンビリした気分です。お互に大分年もとってきましたので体にはくれぐれもお気をつけて下さい。ご健闘をお祈りいたします。

(昭和24年卒)

九〇式初等練習機